

急増するマック (MAC) 菌による呼吸器疾患

— 愛媛医療センターに肺非結核性抗酸菌症センターの開設 —

はじめに

肺 MAC (マック) 症という病気をご存知でしょうか。肺 MAC 症とは、結核菌以外の200種類以上の存在が報告されている非結核性抗酸菌 (NTM) で起こる呼吸器感染症を肺非結核性抗酸菌症といいますが、その中の原因菌として最も多くみられる MAC 菌による慢性呼吸器感染症です。結核菌とは異なり人から人には感染しませんが、病気が進行すると治療が難しくなってきます。肺結核は年々患者さんが減少していますが、肺NTM症の患者さんが急増しています。なんとその中のおよそ90%が MAC 菌による感染です。

2014年の全国調査において肺NTM症は増加傾向で、肺結核を上回る罹患率 (14.7人/10万人年) と報告されており、2007年と比較して約2.6倍に増加しています (図1)。また有病率は人口10万人あたり100をゆうに超えると報告されるほどです。聞きなれない病名かもしれませんが、呼吸器診療をする医師にとっては注目されている呼吸器感染症のひとつなのです。肺NTM症の年間死亡者数は2020年には2,000人を超えて、結核の死亡者数を上回っています (図2)。元来、肺NTM症は肺に病気がもつ人が、免疫力が低下した場合に起こりやすいといわれていましたが、近年は肺に病気がなく、免疫力が正常な人にも増加しています。特に基礎疾患のない健康な中高年の女性に多くみられるようになっています。

以下、最も頻度の多い肺MAC症を中心に解説します。

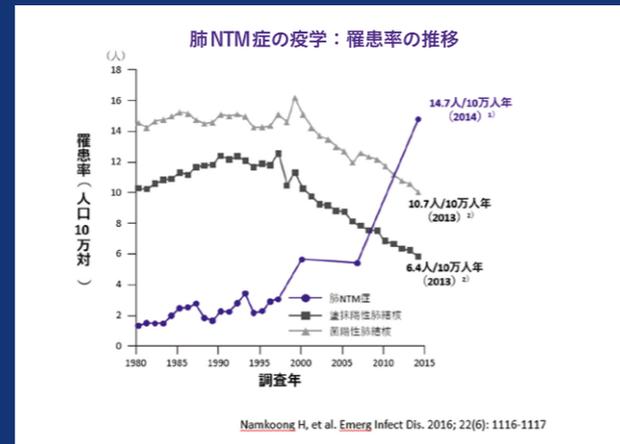


図1

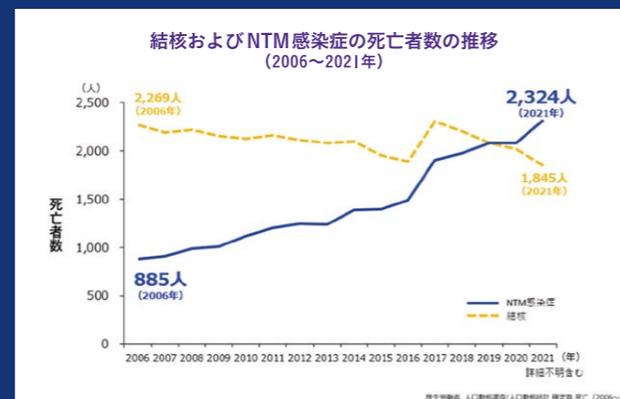


図2

肺 MAC 症の症状

肺 MAC 症は咳や痰、時に血痰などがあります。症状は全く偶然に検診で胸部レントゲン写真やCT検査で見つかることもあります。病気が進行すると微熱や全身倦怠感、体重減少がみられます。

肺 MAC 症の診断

胸部レントゲン検査やCT検査で肺MAC症に特徴的な影がみられます。典型的な肺NTM症の画像の例をお示します。空洞や気管支拡張、小結節・粒状影がみられます (図3, 4のA、B、C)。重要なことは、痰からMAC菌が検出することです。それができれば、肺MAC症と診断できます。但し、MAC菌は広く生活環境に存在する常在菌なので2回以上同じ菌を証明することが必要です。痰のでない場合には気管支鏡検査を行うこともあります。

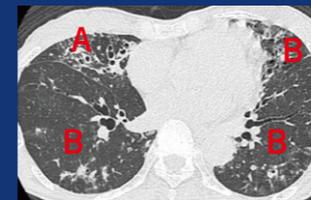


図3

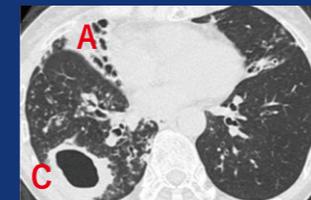


図4

肺 MAC 症の治療

肺MAC症の治療を考える上で、多くの悩ましい点があります。治療には3~4種類の抗菌薬を同時に使用します。肺MAC症に効果のある薬は限られており、1年以上の長期にわたって薬を飲むことが必要です。治療を開始するかどうかは一律には決まっています。肺MAC症は日常生活に支障がないまま緩やかに進行するか患者さんや、また症状がなく、胸部レントゲン写真の影が変化しないこともあるからです。しかし、画像で空洞がある場合、過去の画像と比較して明らかに悪化している場合、そして痰から多くの菌が検出される場合には積極的に治療開始を考慮します。治療期間が長期になること、肝機能障害や消化器症状、視力障害などの副作用の懸念があること、治療を終了しても再発する患者さんが少なからずいること、抗菌薬が必ずしも全ての患者さんに同じように効果が期待できるわけではないこと、外科治療も考えなければならない難治性の患者さんを見逃さないこと、などが肺MAC症の治療の難しくする点です。担当医は患者さんの年齢や症状、病気の進展具合を良く考え、その方により適切な治療を提供することが大切です。

生活上の注意

周囲の方への感染性はありませんので、社会生活で特別な注意はありませんが、MAC菌は土壌や水場などの生活環境に生息しているので、特に家屋内では浴室やシャワーヘッドなどを清潔に保つようにしましょう。

肺非結核性抗酸菌症センター開設について

愛媛医療センターは、長年にわたり愛媛県の結核治療の一端を担ってきましたが、この度「肺非結核性抗酸菌症センター」を設立し、肺非結核性抗酸菌症外来を開設することにいたしました。肺非結核性抗酸菌症 (肺NTM症) は、結核と異なり診断即治療とはなりません。長期間の抗酸菌治療が必要となり、治療が難渋する患者さんがおられることが課題です。外来では当センターの呼吸器内科の医師が診察し、確定診断のための気管支鏡も含めた検査、適切な治療薬の選択、外科的治療の適応、長期的な経過観察や定期検査などを提案して参ります。

令和6年8月から第2・第4水曜日13:30から、
下記の医師が担当します。※完全予約制

■肺非結核性抗酸菌症センター長 渡邊 彰
■呼吸器内科医師 阿部 聖裕、伊東 亮佑、佐藤 千賀、三好 誠吾、仙波 真由子

*可能であればかかりつけ医からの紹介状をお願いします。また曜日等が患者様やご家族の都合と合わない場合には適宜調整しますのでご相談ください。

【予約連絡先】地域医療連携室 TEL 089-990-1923



センター長 渡邊



院長 阿部



独立行政法人 国立病院機構愛媛医療センター

〒791-0281 愛媛県東温市横河原366番地

TEL 089-964-2411

診療日時/月~金 8:30~11:00

休診日/土・日・祝日・年末年始 (12月29日~1月3日)

診療科/呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、神経内科、
糖尿病内科、外科、消化器外科、呼吸器外科、整形外科、
小児科、放射線科、麻酔科 (医師 山内 康裕)
病床数/324床

当院は平成28年4月から松山医療圏の2次救急輪番病院に加わり、救急医療の一端を担っています。令和5年度は年間約1,500台の救急車の受け入れをしています。現在当院は標榜診療科に加えて結核、重症心身障害者、神経難病などの疾患の入院・外来診療を行っています。高次の循環器・呼吸器・神経・運動器疾患のリハビリや生活習慣病対策にも力を入れています。今後も地域に必要な、そして皆様に信頼される医療を提供していきたいと思っています。